福岡教育大学紀要，第71号，第４分冊，239－248（2022）

教育学研究科における「自閉症指導法特講」の概観と効果
高等学校での実践効果を中心に

Overview of Special Lecture of Teaching Method for Individual with Autism Focusing on the Teaching Effect in High School

納　富　恵　子　　桑　野　健太郎

Keiko NOTOMI　　Kentaro KUWANO

福岡教育大学教職実践ユニット　　九州国際大学付属高等学校

（令和３年９月30日受付，令和３年12月23日受理）

高等学校でも能力の高い自閉症のある生徒が在籍し学んでいる。しかし高校教師が，その指導法について学ぶ機会は乏しい。本研究では，第１著者が担当する福岡教育大学大学院教育学研究科教育科学専攻の１講義である「自閉症指導法特講」を取り上げ，その講義内容や教授手法の概要を整理し紹介した。この講義の特徴として開始前に各受講生が過去の実践をまとめ学びのニーズの明確化を行い，課題意識を受講生全員と共有した。また自閉症の障害特性の理解を，生物学的，心理学的，発達的に概観し，特別支援学校学習指導要領自立活動編の自閉症に関連する記述の分析や先行実践を分析整理し発表し，相互に議論し学び合う内容と構成の工夫を行った。受講生である高校教師の第２著者が，その学びと獲得した知識と技能を活用した高等学校での実践を振り返り記述し分析した。第２著者の振り返りと実践の記述からは，教育現場へ応用という点で一定の効果があり，さらに級友である高校生を巻き込んだ発展的な実践が可能となった。

Key words: 自閉症　指導法　大学院教育　高等学校　実践効果　振り返り

1. はじめに

教育界で自閉症と呼ばれる状態は，精神疾患の診断・統計マニュアル（DSM-5）（2014）によれば，自閉スペクトラム症 / 自閉症スペクトラム障害と診断されるようになっている（以下 ASD とする）。発達早期に明らかになる個人的，社会的，学業または職業における機能の障害を引きおこす発達の欠陥に特徴づけられる神経発達症群 / 神経発達障害群のひとつである。ASD は，対人的な相互関係や，相互反応で用いられる非言語的コミュニケーション行動，人間関係を理解し，発展させ維持することが困難であり，それに加えて，行動や，興味，又は活動が限定的で繰り返しが多い。症状は発達とともに変化するが，代償的に覆い隠されることもある。また，以前は，アスペルガー障害と診断された人は，現在は言語や知的障害がない ASD と診断されている。つまり高校にも知的遅れのない ASD の診断または類似の特徴をもつ生徒が在籍している。しかし外見からはわかりにくく，わがままやしつけの不足などと誤解されがちである。

近年高校でも通級による指導が制度化されたが，文部科学省の調査からも，特別支援教育に関する理解や指導力について，義務教育段階と比較し課題がある。具体的には，平成 19 年以降，校内委員会や，実態把握，コーディネーターの任命など体制整備は進みつつあるものの，個別の指導計画の作成，個別の教育支援計画の策定，巡回指導や専門家チームの活用は 30% から 50% 程度で，研修も 70% と実際の指導や支援の実

態には課題があり，指導や支援を改善する面での課題が大きい（文部科学省，2015）。調査からは，高等学校にも発達障害等困難のある生徒が2%程度在籍しており，特に定時制・通信制に多いことが進路に関する分析結果から指摘されている。ASDを含む発達障害の可能性のある高校生は高等学校で学んでいるが，校内体制は整いつつあるものの，具体的な個に応じた指導については課題が残っている。

本研究の目的は，第1著者が担当した自閉症の指導法に関する大学院での講義が，これまで特別支援教育に関して専門的教育を受けてこなかった高校教師である第2著者（以下K）に，どのような自閉症指導に関する専門的な知識と技能をもたらしたのか。また，それを実践的に指導に生かすことができたかを，第2著者が当事者の視点で振り返り，分析し，教師の専門性と実践的研究力の育成に役立つ大学院の講義の在り方を明らかにすることであった。

2. 大学院における自閉症指導法特講の意図や講義の構成

(1)「自閉症指導法特講」の概観

第1著者が担当する「自閉症指導法特講」は，福岡教育大学大学院教育学研究科教育科学専攻の特別支援教育に関する科目に位置付けられている。教育科学専攻では，「学校教育の諸課題を見据えて，学校現場での実践を総合的に構築し，教育課題を解決できる研究力の育成を目指し，そのため，小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等の教員や大学教員を志望する者及び現職教員や教育行政の指導主事等に，学校教育活動の充実に資するよう教育課程，授業，学級経営等の改善にかかる研究力・指導力の基礎となる知識・技能の修得を目指す」とされている。

第1著者は平成21年に教職実践専攻に専任教員として異動後も，教育科学専攻の本講義を担当した。大学院における特別支援教育の科目の特徴は，「特別支援教育に関する専門的知識技能を身につけるとともに理論的・実践的な研究力を育成する科目，障害のある子どもの指導法に関する理論的・専門的知識を身につけるとともに実践的な研究力を育成する科目」とあるように確実な知識とともに実践的な研究力の育成を目指している。

本講義では，ほぼ毎年，1名から最大8名程度の受講生がおり，特別支援教育を専攻する院生以外にも，心理学や教科科学を専攻する院生も受講しており，教育科学専攻の院生の自閉症の指導についての関心が高いことがうかがえた。

今回紹介する内容や構成になるまでには，試行錯誤があった。開設当初は，最新の知識を英文の学術書で共有することで英文原著も読める研究力を育成すべく，米国の大学院レベルの教科書Mash EJ & Barkley RA 編集Child Psychopathologyの Klinger LG & Dawson Gが担当した第8章　Autistic Disorderを分担して輪読し解説した。しかしすべての受講者が自閉症研究を行うわけでなく，次年度には，より実践的な内容を含む，National Institute of Mental Health（MIMH）のホームページで公開されている自閉症の最新情報の解説を輪読した。内容的には，基本的な疾患や症状の解説，早期発見，診断手続き，治療などが体系的に解説されており，より分かりやすく最新の情報は得られたが，受講生にとって，身近な実践的課題を解決するという内容ではなかった。

このことの反省から，より専門的な知識と技術を，実際の教育現場や支援の場で活用できるような内容構成に改善すべきと考えた。実際に，第1著者は，福岡教育大学の附属障害児治療教育センターで，TEACCHプログラムの原則の一部を取り入れた実践を行い，その効果を検証してきた（Notomi，2001）。さらに，それを，福岡県教育委員会や福岡県教育センターからの依頼で，実際の小学校・中学校・特別支援学校に広げる指導助言をおこない指導主事と協力しながら学校現場の自閉症のある児童生徒の指導力の向上に寄与した。その成果は福岡県教育センターで公開されていた。自閉症の理解と効果的な指導に関する一般的な講義とともに，自らが関与した実践事例を示しながら，より実践的な力量が獲得できるような内容や構成に改善することが大学院教育学研究科の育成する人材像に近づけることができるのではと考えた。自閉症の基本的な障害理解，アセスメント，学習指導要領，効果的な指導へと展開するような講義の中で，院生も調べ学習や，実践論文を分担して要約しながら教え合う場面がおこる構成を考えた。また，2009年には，これまでの実践をまとめた教科書「自閉症の基本障害の理解と支援・対応法」も出版できたので，実践事例を，より解決したい身近なものとして選択してもらうことができるようになった。

以上の経緯から，シラバスには，受講生には自閉症や発達障害の児童生徒の指導法に関心があること，可能であれば，自閉症を含む発達障害の人への指導の経験や相談経験があることが望ましいとした。また，授

業担当者が，精神科医として臨床経験を持ち附属特別支援教育センターでの指導経験があることも公開した。

授業の概要と工夫点について表１にまとめた。

表１　自閉症指導法特講の概要と工夫点

回	内容	工夫点
1	オリエンテーション・自閉症の概要・DVD 自閉症の子どもたち 指導の目的　自閉症の症状　指導のゴール 構造化された指導　効果的な事例	自己紹介 自閉症児指導の課題意識の共有 動画による自閉症児の実態の紹介
2	ASD の今日的理解　疫学 特性の理解　段階的な指導　アセスメントの必要性	特別支援教育のゴールは自立と社会参加であることを示した。
3	神経心理学・画像診断 動画での質疑を含めて，社会でのサポートシステムの紹介 法制度の支援体制の変化　合理的配慮　共生社会の実現	院生からの質問に対して，現状を解説し，合理的配慮は，甘やかしでなく権利擁護であることを指摘した。
4	効果的な指導法の例（応用行動分析・TEACCH・ソーシャルストーリー・PECS）を紹介　調べ学習を行いレポート作成と分担発表	調べ学習で TEACCH や応用行動分析の技法を整理した。
5	早期発見と診断 自身を時間空間の中に位置付けられない。構造化を分かりやすく示した，シンプル・クリア・ビジュアルな環境調整を行う。 問題行動に対して，構造化・再構造化が奏功しない場合に，応用行動分析（ABC 分析）を行う手順の紹介	早期発見に役立つ MCHAT などのスクリーニング方法などを紹介 診断後，医学的治療だけでなく心理教育的アプローチが重要であることを強調した。
6	早期発見と診断から教育的アプローチへ 医療ができること　診断があることで福祉サービスにつながる。 国際的な診断基準　DSM-5　ICD11 について。	診断がゴールではなく，適切な医療・福祉・教育的サービスの出発点になる意義を指摘した。
7	新しい診断の方法　ADI-R と ADOS について調べて発表交流	インターネットも活用し検索して調べ要約し，協働学習を行った。
8	自閉症と自立活動　特別支援学校学習指導要領自立活動編紹介 ６区分２７項目の紹介と，自閉症に関する記述を整理する。	自閉症に関連する記述を抜き出し分担をして表に整理し交流
9	附属福岡小学校の授業づくりセミナーを活用し，構造化や実態把握の重要性を学ぶ。	見通しのもてる構造化された授業を，附属学校の動画配信で学ぶ。
10	「自閉症の基本障害の理解とその支援・対応法」の中から，興味関心をもとに選択し，パワーポイントを使い発表。 ①　就学前通園施設の実践 TEACCH プログラム	第１著者がコンサルテーションを行った実践事例の内容を，受講生が報告し，質疑を行った。
11	「自閉症の基本障害の理解とその支援・対応法」の中から，興味関心をもとに選択し，パワーポイントを使い発表 ②高機能自閉症児へのコンピュータ学習を動機付けとしたソーシャルスキルトレーニングプログラム「SMILE」や「お話日記帳」	第１著者が大学院生と取り組んだ ICT を活用した実践事例の内容を，受講生が報告し，質疑を行った。
12	指導効果の検証法 単一事例法・実践群・対照群・データの数値化・ベースライン	効果の検証法について例示し，指導効果検証の視点を提供した。
13	各院生の授業開始時に課題としていた実践を，新たに学んだ知識・技能を活用し実践を改善し事例報告にまとめて報告する。	新たに学んだ知識，技能を活用し，課題解決を行った実践について交流した。
14	保護者との連携とエンパワメント　英国自閉症協会が開発した SPELL の原則の紹介と事例報告の振り返り。 保護者のエンパワメントにより保護者にニーズにあった支援システムが構築できる可能性を紹介した。	保護者との連携の重要性と，自閉症指導における基本的なポイントである SPELL の原則を活用しての事例報告の振り返りを行った。
15	授業のまとめ　一貫した指導のために必要な「個別の教育支援計画」や，福岡県・福岡県教育委員会が提案している「ふくおか就学サポートノート」について紹介。	最終レポートで，１４回の授業を振り返り，作成物をまとめた。 校内の組織的支援を紹介した。

(2)「自閉症指導法特講」で第２著者が取り組んだ課題の実例

本講義では，自閉症指導に必要な，知識・技能について，より主体的に学び，実践にいかせる工夫として，課題を定期的に課している（表1）。ここでは第２著者（以下Ｋ）が取り組んだ課題について実例とその学びを示した。

１つ目は，自立活動に関する課題である。高校教師は，特別支援学校学習指導要領の自立活動に関する項目を目にすることはほとんどない。しかし，その項目の中には，教育現場の教師に有益で，すぐに応用できる情報が記載されている。本講義では，教師にとって手に取りやすく，すぐに活用できる内容を取り扱うことが多かった。表２は，Ｋが，他の受講生と分担し，自立活動の内容（自閉症に関する具体的指導内容例）に関する口頭発表を行うために作成した課題である。最初に，区分・項目ごとに，予想される困難をまとめた。次に，それぞれの困難に対して，どのような指導が効果的なのかに関して，個別の指導ポイントをまとめた。本発表と他の受講生との交流を通して，区分・項目ごとに困難を予測することで，見通しを持て，主体的に，安心して，楽しく，レベルアップできる段階を確認できることを学んだ。また指導のポイントが分かり，どのようなスケールを用い，自己評価や他者評価を行うべきかが明確になった。結果として，児童・生徒の自己肯定感を高めることにつながることを学んだ。

２つ目は，先行実践の例から選択したコンピュータ学習を動機付けとしたSST（ソーシャルスキルトレーニング）に関する課題である。Ｋは，PowerPointスライドで，奥野・納富（2007）の実践研究をまとめ口

表２　受講した第２著者がまとめた自立活動の内容（自閉症に関する具体的指導内容例）

区分	項目	困難	指導のポイント
１．健康の保持	(1) 生活のリズムや生活習慣の形成に関すること	・特定の食物や衣服に強いこだわり ・他者視点の獲得	・困難の要因の特定 ・１日の生活状況の把握
	(4) 障害の特性の理解と生活環境の調整に関すること	・感覚過敏やこだわりがあったり，大きな音や思い通りにいかなかったりすると，情緒不安定になる	・カームダウンエリアなどを活用し，自ら刺激の調整を行い，気持ちを落ち着かせる
	(5) 健康状態の維持・改善に関すること	・障害の二次的要因による肥満，体力低下，食欲不振	・日常生活において，知識を入れて自己の健康管理ができるようにする
２．心理的な安定	(1) 情緒の安定に関すること	自分の気持ちが伝わらず， ・自ら自分をたたく ・他者に対して不適切な関わり方をする	・興奮を鎮める方法を知る ・感情カードなどを活用し気持ちを伝える手段を得る
	(2) 状況の理解と変化への対応に関すること	・普段と異なる状況や急な予定変更に対応できず，どのように行動すべきかわからない	・スケジュール等を活用して，状況を理解して適切に対応する ・場に応じた行動の仕方を身につける
３．人間関係の形成	(1) 他者とのかかわりの基礎に関すること	・他者とのかかわりをもとうとするが，その方法が十分に身についていない	・少しずつ身近な教師と関係を形成する ・感情を表す絵を活用し，自分や他者の気持ちを視覚的に理解したり，他者と気持ちの共有を図ったりする
	(2) 他者の意図や感情の理解に関すること	・総合的に判断して相手の思いや感情を読み取ったり，それに応じて行動したりできない ・言葉を字義通りに受け止める	・相手の立場や相手が考えていることを推測させる ・他者と関わる際の具体的な方法を身につける
	(3) 自己の理解と行動の調整に関すること	・自分の長所と短所に関心が向きにくい ・自己理解が困難 ・友達の行動に適切に応じることができない ・特定の光や音に混乱し，行動調整が困難になる	・体験的な活動を通して，自己理解を促す ・他者の意図や感情を考え，対応方法を身につける ・感覚や認知の特性への対応に関する内容も関連付けて具体的な指導内容を設定する

頭発表を行った。まず，自閉症児は人間関係の形成において，他者とのかかわりを持とうとするが，その方法が十分に身についていないことや，総合的に判断して相手の思いや感情を読み取ったり，それに応じて行動したりできないといった困難を抱えていることをまとめた。次にその困難を克服するために，学校生活で対人関係を円滑に形成し維持するための有効な指導法の１つである SST についてまとめた。具体的には，自閉症児への SST の基本原則は，長所を活用することであり，抽象的なことの具体化，活動の見通し，動機付け，般化の４つを指導の中に組み込むことが重要であることを記載した。これらの基礎を抑えた上で，奥野・納富（2007）の実践研究である，高機能自閉症児へのコンピュータ学習を動機付けとしたソーシャルスキルトレーニングプログラム“SMILE（Social skills training Motivated by IT, Learning and Education）”を図１と図２にまとめた。

SST 全体の内容を，指導カリキュラム・指導の流れと，指導時の児童の様子・指導の結果の２つにまとめ発表を行い，最後に以下の考察を要約した。高機能自閉症児は，学習の動機付けの水準が低く，興味のない課題には取り組まないことがあるが，各児童が興味を持っていたコンピュータを使った活動を取り入れたソーシャルスキル学習である SMILE によって，児童たちは高い動機付けを維持することができ，苦手とし

指導カリキュラム

ステップ	回数	指導内容	目標となるコンピュータスキルとSST
Ⅰ	1 2	・手順書に沿った学習方法１ ・自己紹介の仕方について ・手順書に沿った学習方法２ ・チーム名を決める ・学習時間の約束について	・手順書の使い方を学ぶ ・初めて会った人に対して自己紹介できる ・パソコンの基本操作を学ぶ ・発表の仕方に従い自分の意見を発表する ・決められた約束を守ることができる
Ⅱ	3 4 5	・ワードでの文字入力１ ・気持ちの表現方法について ・ワードでの文字入力２ ・教えてほしいことを伝える方法 ・ワードでの文字入力３ ・場に応じた適切な声の出し方	・ソフトキーボードを使って文字入力ができる ・過去３週間を振り返り自分の気持ちを表現できる ・漢字変換ができる ・わからないときは先生に助言を求めることができる ・自分の名前が打てる ・声のものさしを理解し適切な声の出し方を実践できる
Ⅲ	6 7	・年賀状の作成 ・年賀状にかかわる一般常識について ・年賀状の印刷方法 ・描いた鳥の絵についての発表	・縦書きの入力ができる ・年賀状について知っていることを発表できる ・印刷ができる ・自分の絵の工夫した点がんばった点を発表できる
Ⅳ	8	・お店での切手の購入方法 ・全8回の学習内容の振り返り	・適切な方法で切手を買うことができる ・過去を振り返り、感想を書くことができる

図１　先行実践 SMILE（奥野・納富）のプログラム全体の内容（指導カリキュラム・指導の流れ）の発表スライド

指導時の児童の様子・指導の結果

	A児	B児	C児	D児
SST場面での様子	自分から積極的に発言することはない。わからなくてもじっと援助されることを待っている。	順番でコンピュータを使うことができない。わからないときに、物にあたることがある	積極的に手を挙げ、発言するが、保護者に見られていることを意識して、発言することが多い。	指導中の離席が頻回。興味・関心の赴くままに行動する。
コンピュータスキル	自己流の方法（親指で左クリックをする）でゆっくりだがクリックはできる。	マウスを自由自在に操することはできる。	両手でキーボードを打ちながら入力することができる。	基本操作はできる。両手でキーボードを打つこともできる。
結果	振り返り表で気持ちを表現できるようになった。	わからないときに助けを求めることができるようになった。	苦手なことがある自分を受け入れることができるようになった。	視覚的援助によって指示が通るようになった。
コンピュータ学習におけるスキルの変化	ソフトキーボードによる文字入力を学習。年賀状を作成し、印刷することができた。		文節ごとの変換を学習。年賀状を作成し、印刷することができた。	文字の大きさやフォントの換え方を学習。年賀状を作成し、印刷することができた。

図２　先行実践 SMILE（奥野・納富）の内容（指導時の児童の様子・指導の結果）の発表スライド

ていたソーシャルスキルを獲得することができた。

これら２つの課題は，理論などの専門的知識が乏しい高校教師でも取り組むことが十分可能で，教育現場で即実践できる内容であった。また発表を行う中で，理論を学ぶことを通して，これまでの経験を振り返る機会を得ることができた。

3. 第２著者の講義受講生としての振り返り

第２著者（以下Ｋ）は，高校教師として教育現場に立ち，経験を積んだ後に，大学院で学んだ者として，高等学校の教育関係者全員が「自閉症指導法特講」（以下本講義）を受講する機会があれば，円滑に自閉症生徒への教育活動に取り組めると実感した。大学院での学びは，理論の学び直しや教員が抱える課題を専門家に相談することに繋がり，特に，２から３年以上現場を経験した教員にとって，効果的な学びの場となると考える。

私立高等学校に勤務の経験から，高等学校における生徒受け入れの現状は，中高連絡会を通して生徒に関する情報共有が行われたり，家庭が高等学校に対して留意すべき事項をプリントなどで自己申告したりするなど，入学時に生徒情報を収集する仕組みが確立してきている。近年では，高機能自閉症と診断を受けている旨を，高等学校が留意すべき事項のプリントに明記して，入学する家庭の数が増えてきた。収集した生徒情報の対応として，学年会議の場で，担任が該当生徒の情報を伝えると共に，個人的配慮を依頼することが，勤務学校で高機能自閉症と診断を受けた生徒への対応であった。

普通高校の教師のほとんどは，発達障害という言葉に触れたり，障害のある生徒を担当していたりと，多少なりとも自閉症指導に関する現場経験はある。しかし全員が，専門的な教育を受けて指導しているわけではない。インターネット上の情報や年１度開かれるスクールカウンセラーからの講演を聞き，対応しているのが現状である。正確な知識を有さない大多数の高校教師の１人として，Ｋは本講義を受講し，様々な気付きを得て，現場へ学びを還元することができた。以下，その概要を振り返り記述した。

本講義の冒頭で「経験を理論化することで，気付きがある」と学んだ。経験は対応している教師のみに起こっているのではなく，その周囲で生活している者にも起こっている。例えば，Ｋは，クラスの生徒が，１年間の学校生活を経て，高機能自閉症の生徒に適切に支援していることに気付いた。具体的には，高機能自閉症の生徒が注意散漫になっているときに，周囲の生徒が「○○くん，こっちみて，これ終えたら，次これする」と「シンプル」「クリア」「ビジュアル」の観点に基づいた支援を行っていることに気付いた。この経験は，本講義の中で，重点項目として取り扱われた，構造化された指導理論と関連があった。Ｋは，視覚化や具体化といった，言語的というよりむしろ，視覚的に説明することや，言葉を使用する際は，なるべく短い言葉で示すことは，自閉症の人々の不安を和らげ，落ち着いて行動できるようになる効果があると講義で学び，その学びを実践している姿を，周囲の生徒は日常的に目にしていた。そして学校生活の中で，周囲の生徒も，構造化理論を無意識のうちに活用して，適切な支援が行えるようになっていた。この気付きに対して，Ｋが構造化理論について学んだことを，その生徒たちと共有すると，生徒たちは理解を示し，自分たちの支援を振り返っていた。このように受講生として日常的な学校生活での経験を大学院での学びと融合させることで，教師だけでなく周囲の生徒にも気付きが生じることを実感した。

上述の通り，本講義で学んだ内容は，学校生活の様々な日常的場面で応用することができた。例えば，言葉だけで指導を行った時には，それが原因で生徒に情報が的確に伝わらず，問題が起きた事例を経験した。重要な式の集合場所を言葉だけで伝達したところ，それが的確に伝わらず，生徒と保護者共に集合場所に辿り着くことができなかった。そのため，その家庭は式に出席できず，後日，式を再度実施することになった。事前に，その生徒の特性を理解していれば，言葉だけではなく，視覚的支援などより特性に合った支援を行うことができたかもしれない。「自閉症と分かっているのなら，構造化された指導をまず行い，その上で構造化が適していないのであれば，詳細に記録を取っておき，応用行動分析を行うと良いのではないか」と教わったことが心に強く残っており，現在は学んだ内容を基にした個への配慮が，少しずつではあるができるようになった。

特別支援教育のゴールは「自立と社会参加」であると学んだ。大学進学者の多い高等学校では，大学進学率が一般的に重視されるため，多くの高校教師は，大学入試を見据えた教科指導に重点を置いてしまいがちである。また，試験の点数を上げるための研究会などは，頻繁に開催されているものの，特別支援教育に関する研究会は，それと比べると少ない。この現状の中，学校勤務と並行して本講義を受講することで，今現

在行っている教育が，子どもたちの将来の自立と社会参加とどのように繋がっているのかについて，立ち止まって考えることができた。高等学校は，子どもたちを実社会へ送り出す教育機関である。高等学校を卒業すると，生徒は有職者になったり，大学でさらなる研究を行ったりする。だからこそ，目の前の生徒が実社会に出たときに自立できるように，指導する側も指導される側も，人生をより幸せにできるよう，また幸せへの選択肢が増えるように，本講義で学んだことを発揮して，教壇に立ち続けていきたいと考えるようになった。

4. 高校教師である第２著者の高等学校での教育実践の振り返り

本講義の受講中及び受講後，Kは担任として受け持つ高機能自閉症の診断を受けた高等学校２年生に対して，本講義で獲得した知識・技能を活用して２つの教育実践を行った。Kは自閉症指導法特講を受講する前から，この生徒を担任として受け持っていた。受講開始時には，自閉症支援に関する専門知識も備えていなかったため，次の４つの課題を抱えていた。

１つ目は，201X年３月に学校行事の一環として，これまで生徒が行ったことがないA地方の大学視察の際に直面した問題である。出発のための集合場所を普段の学校ではなく，駅に設定したところ，時間通りに集合することができなかった。生徒は携帯電話は持っていたが，「緊急時に携帯電話を使用して，連絡をする」という教師の言葉を字義通りに捉えてしまった。その結果，教師からの着信を取ることができなかった上に，その生徒自ら，教員に電話を掛け直す行動を取らなかった。なぜなら，緊急時に携帯電話を使用して，電話をかけるのは「教員」であり，「生徒自身」ではないと，字義通りに言葉を解釈していたからだった。さらに悪いことに，教員が何度も電話をかけるが，生徒は教員の電話番号を登録していなかったため，教員からの着信を取らなかった。これは日ごろ保護者から，「知らない番号の着信は取らない」など，携帯電話の使い方に関する注意や説明を受けており，その印象が強く残っていたことに起因する行動であり，これも言葉を字義通りに受け取る性質をKが十分理解していなかったことが課題として挙げられる。

２つ目は，学校の日常生活の中で頻繁に発生した問題である。生徒は，臨機応変な対応が苦手だった。例えば，急な時間割変更のため，翌日に体操服が必要になったときに，その準備ができなかった。生徒の思考には，一定の規則性が完成しており，その規則性に従って生活している。体操服を準備できなかったときも，生徒は「おそらく自分は体操服を忘れてしまったのだと思う」という独特な表現をするだけで，柔軟に対応できなかった。このような生徒に対する適切な支援の在り方に関する知識と技能不足が課題であると感じた。

３つ目は，教員や他の生徒からの情報伝達のときに起きた問題である。生徒は，言葉の聞き取りが極端に苦手であった。例えば，英単語学習においてペアワークをする際に，「診断」と言われたのを「死んだ」と受け取ってしまい，それ以外の言葉には聞こえなくなるということが頻繁にあった。ペアの生徒が気を利かせて「病院で出される診断」と文脈を与えると，生徒はなるほどと理解した様子だった。音のみの手がかりであると似た音の言葉と混同して，話された言葉を理解することが苦手な生徒に対する支援の理解が不十分であった。

４つ目は，学校行事の一環として，201X年７月に他都市での講演会に参加した際に起きた問題である。交通機関として，飛行機を利用したが，生徒が手荷物預かり証を機内で紛失してしまい，周囲に迷惑をかけてしまった。さらに，宿題など各教科から日常的に出される課題などの一定の規則性を持つ提出物に関しては問題なく管理できたが，保護者の印鑑が必要であったり，変則的に提出を求められたりすると，管理ができなくなってしまうことが多々あった。また，制服に関しても，組章や校章といった細かな物の管理は苦手だった。このように物の管理が苦手な生徒に対する支援が不十分であった。

Kは本講義で，これら４つの問題を具体的な事例として共有し，どのように支援すべきかを学んだ。特に有効だった学びは英国自閉症協会のSPELLの観点である。表３はSPELLの観点を，上述の４つの問題解決のために活用した支援例である。これらの観点に基づいて，日々の学校生活の中で適切な支援を行い，理論の実践と融合を図った。その具体的実践例として，２つの学校行事を通して，対象生徒の引率を行った事例を取り上げる。まずは201X年７月に高校野球県大会に引率した事例である。Kはグレイのソーシャルストーリーを参考に，他者および自分を含めた状況を俯瞰的な視点から理解できるように，201X年３月に行った県外の大学視察での失敗を物語にした。物語の主人公となるのは，集合場所がいつもとは異なる，馴染みのない場所だったことから，どこに行けば良いかが分からなかった生徒である。物語の主人公が困難を

表３　SPELL の観点から問題解決を図るための第２著者の支援例

	意味	支援例
S	Structure　構造	・目立つ掲示物を写真で説明する（視覚的支援）。 ・具体的にすべきことを整理する。（降りるところ，集合するところ，困ったときにすることの３つを整理して，スケジューリング化する。）（simple, clear, visual） ・聴覚的誤解が生まれないように，決めたことを「言語化」し，それを読むだけで，行動することができるように支援する。
P	Positive　肯定的	・「前回の失敗は，学びの機会を与えてくれる」と説明する。 ・最終的には，次にうまくいけば良いのだからと励ましながら，成功する手立てを共に考えていく。 ・本人の「成功したい」という気持ちを引き出すように接する。
E	Empathy　共感	・前回の失敗をまずは自分の言葉で語らせる。支援者が「なるほど」という言葉を多用することで，本人の感情は自然なものであると安心感を持たせる。
L	Low arousal　おだやか	・いつも穏やかに，相手に興味関心を持って自然に接する。 ・緊張させない，普段の環境の中で対話を行う。 ・他の生徒も巻き込むことで，１人で問題を抱えているという雰囲気を作らない。
L	Link　連携	・引率担当者と打ち合わせを行う。事前に行程を確認し，どこで困難が生じるのかを確認しておく。そのポイントを克服するための構造化を考えて，支援していく。また引率者に最悪の事態を伝えておき，その際にどうするかを決めておく。

抱えつつも，周囲に援助要請ができない様子も盛り込んだ。物語を伝えた後で，個別の支援を行った。生徒は，「そういうことか」と理解した。集合場所が，生徒にとって馴染みのないＢ球場であることや，集合場所が普段は全く使用しないＣパークの駐車場であり，さらに普段とは異なる時間帯に集合となるため，構造化理論を活かしてプリントを作成した。図３は，実際に配布したプリントである。「シンプル」「クリア」「ビジュアル」に支援を行うために，配慮を行った。具体的には，地図だけでなく，現場の写真を添付した。また，地図をより見やすくするために，生徒が利用するＣパーク駅からの道をマーカー等で示すなどした。さらに，何時の列車に乗車すれば間に合うのかを示すために，時刻表を記入した。万が一，集合時間に間に合わないときは，どうすべきか具体的に記載した。これらの支援を行った後，引率の日が訪れたが，生徒は遅刻することなく，集合場所に集まることができた。この結果は，自閉症指導法特講で学んだ支援の有効性を表している。教員に専門的知識と技能があれば，高等学校現場で問題を予測し，生徒が円滑な学校生活を送るための支援を行うことが十分に可能であると実感した。

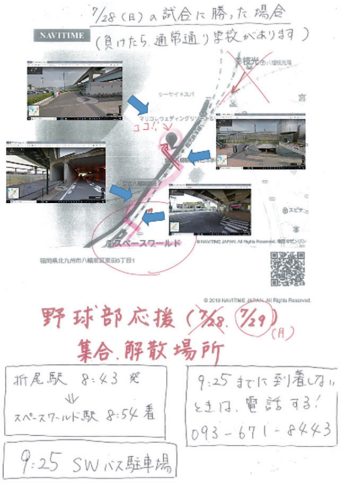

図３　「シンプル」「クリア」「ビジュアル」を意識した，集合場所に関するプリント

次に，201X＋１年２月に修学旅行に引率した事例に関する内容である。集合場所は，学校から距離のあるＤ空港に現地集合となり，道中では飛行機を利用してＥ県まで移動する必要もあった。さらには，Ｅ県から東京ディズニーランドに移動し，広大な敷地内を自由に歩きながら，近隣のホテルに定刻までに帰着しなければならなかった。Ｋは，SPELL の観点を活用し，問題なくこの学校行事を終わらせ，生徒に自信を付けてもらおうと決意した。

201X 年７月に高校野球県大会の引率に成功した経験から，「目立つ掲示物を写真で説明すること」と「具体的に何をすべきかを整理すること」の２点に特に留意した。そして，高等学校だからこそ取り組みたいこととして，教師であるＫだけが支援を行うのではなく，クラスの生徒全員で支援を行うことを試みた。具体的に，Ｋがクラスの生徒に支援方法について話を行い，その生徒たちはその話を基に，どのような場面で支援を要するのかを考え，準備を行い，実際の支援に当たった。生徒たちはまず，集合に関する支援として，降りるところ，集合するところ，困ったときにすることの３つの情報を整理して，スケジューリング

化するために，画像付きでプリントを作成した。次に生徒たちは，飛行機を利用して目的地に向かうため，201X 年 7 月に首都圏での講演会に参加した際に，手荷物預かり証を紛失した問題に対して，今回はどのように支援すべきかを考えた。変則的なことへの対応が苦手なため，大事なものを収納するファイルを準備して，修学旅行前から，そのファイルに重要なものを入れる習慣付けを行うように支援した。そして修学旅行当日は，空港で預かった手荷物預かり証をそのファイルで管理した。この他にも生徒たちが主体的に考え支援を行ったため，K は深く介入せず見守るよう努めた。結果として，K の介入なしで，生徒たち自身で支援を行い，問題なく修学旅行を終えることができた。

この 2 つの教育実践は，これからの時代で重要となるインクルーシブ教育にも繋がり，生徒たちは人間の多様性を尊重した環境づくりを実経験として学ぶことができた。この点において，本講義での学びは，担任が中心となり，関わりを持つ特別活動だけでなく，各教科指導にも応用でき，教育効果をさらに高める可能性があると感じた。

5. 考察

文部科学省（2015）の「高等学校における特別支援教育の現状と課題」に指摘されるように，高等学校では，特別支援教育の体制は整いつつあるが，個別的な指導にかかる専門性の確保や研修が十分でなく課題がある。

本研究では，第 1 著者が担当する福岡教育大学大学院教育学研究科教育科学専攻の 1 講義である「自閉症指導法特講」を取り上げ，その講義内容や教授手法の概要を概観し，受講者である高校教師の第 2 著者が，その学びを理解し活用し高等学校での実践で効果的であった点の分析を行った。その結果を踏まえ，以下考察を行う。

(1) 大学院教育学研究科での自閉症の指導法の教授の工夫

第 1 著者は，教員養成大学の大学院教育学研究科での講義を，どのように行うか試行錯誤を繰り返し，講義内容と方法を工夫してきた。受講生は現職の教員や教員志望者が多いことから，最新の研究結果の伝達的な講義や英語論文の輪読では受講生が抱える課題意識とずれ，専門家としての教師の成長につながりにくいと考えた。佐藤（2009）は，教師は，職人としての側面と，専門家としての側面があり，両者をあわせたものが教師としてのコンピテンスであるとしている。専門家としての教師の能力は，「省察と判断」とそれを支える「専門的見識」にあるとして，「技」は，模倣により伝承され「専門的見識」は経験と理論の省察により形成されると指摘する。しかし，日本の高等学校の特別支援教育の現状からは，効果的な自閉症生徒への指導や支援の実践は，「技」として模倣できる状況ではないと推測する。この講義では，個人情報が特定されないように配慮し，開始時に自閉症の児童生徒の指導に関する各受講生の実践を記述し，振り返り，課題を明らかにすることを求め，受講生同士で交流し課題意識を共有した。この課題意識を基盤にして，課題解決に役立つ知識や技能を教授する構成をとった。この工夫により受講生である第 2 著者は，自らの指導上の課題解決に，知識や技能を，どのように活用できるかと考え続け，学びの意欲を継続することができたと考える。

また，基本的な学術論文の紹介に加えて，最新の情報はインターネットで検索し，調べ学習を行い，受講生で相互に学び合う協働的な学びが起こるように工夫した。さらに，第 1 著者が関与した実践事例（納富，2009）の中で，各受講生が問題解決に役立ちそうな実践例を選択し，分析し，整理してパワーポイントにまとめ，発表する事を課した。このようなプロセスは，モデルとなる実践を分析し，受講生の指導の改善への円滑な橋渡しに効果的であったと考える。第 2 著者の学びの活用の記述からは，自閉症指導法に役立つ新しい知識や技術に出合うたびに，省察をくりかえし学術的な探求を行うサイクルが形成できたと考える。

また，自立や社会参加のために欠かせない自立活動についても，特別支援学校学習指導要領自立活動編を分析して，自閉症の児童生徒の困難とその解決に必要な力は何かを整理する活動を通じて，生徒一人一人の個々のニーズに合わせて，支援を焦点化していく経験ともなったと考えられる。

(2) 高校教師が「自閉症指導法特講」で獲得した知識・技能は自閉症生徒の指導に効果があったのか？

第 2 著者の実践の記述からは，高校で担当する自閉症の生徒の，これまでは理解が困難だった言動も，冷静に専門的な判断ができ，的確に指導できるようになったことが明らかになった。本講義の一連の学びは，特別支援教育については専門性を持たなかった高校教師にとっても特別な教育的ニーズのある生徒の理解という確かな専門性の向上と効果的な実践につながったと考えられる。本講義の工夫でも述べたように，受講

生の課題意識やニーズにあわせ，意欲的に学べるように，実践例を提示し，選択を促し，分析して発表し，受講生で交流したことなどが，実際の活用をイメージでき効果的な支援につながったと考える。

さらに，第２著者は，特別支援教育の目標は，自立と社会参加であり，本人の幸せにつながる支援であると理解し，指導が何を目指すのかを常に意識するようになった。また共生社会の実現のためには，周囲の生徒が意図的，自発的に適切な支援ができるように考えさせ，学校内に自然なサポーターを増やした。

第２著者の実践記録からは，実践が成功しても，そこに満足せず省察を続け，より良い支援について取り組み続けていたことがうかがえる。佐藤（2009）は，歴史的な転換期を生きる教師は「教える専門家」であると同時に「学びの専門家」として修養と研修に励む必要があると指摘している。高等学校における特別支援教育の現状は，歴史的転換点にあるといえる。自ら学び続けることに加え，校内研修や啓発に取り組み，より質の高い実践が，多くの高校教師に広がるための取り組みを次の段階で期待したい。

これからの予測できない未来に向けて，児童・生徒を教育する教師は，自らも変革をもたらすコンピテンシーに関する体験が必要と考える。OECD は「コンピテンシーを身に着けていく能力は，それ自体が見通し，行動，振り返り（Anticipation，Action，Reflection = AAR）の連続した過程を通じて学習されるべきものである。振り返りの実践とは , 判断したり , 解択したり , 行動する際に，これまで分かっていたことや想定したことから一歩引いて，状況を他の異なる視点から見直すことによって，客観的なスタンスをとることができる力である。（中略）見通しも 振り返りも，いずれも責任ある行動の前提となるものである。」としている。この講義は，第２著者に，この AAR の体験を提供できたことが推測できた。

(3) まとめにかえて

令和３年度福岡教育大学大学院教育学研究科教育科学専攻は募集を停止し，本講義も終了となる。今回，一事例での検討という限界はあるが，受講生とともに講義を振り返り分析を行った。大学院教育学研究科の特別支援教育の分野では専門的に扱う障害の領域は狭くても，OECD が提案する AAR のプロセスを講義提供者が意識しながら，活用しやすい実践的な演習を取り入れることで，実践研究を行える力量形成が可能となり，学校現場でも効果的な実践が波及しやすいことが示唆された。

引用・参考文献

米国精神医学会（2014）DSM-5　精神疾患の診断統計マニュアル（日本語版）医学書院

キャロル・グレイ（2005）ソーシャルストーリーブック　書き方と文例　クリエイツかもがわ

文部科学省（2015）高等学校における特別支援教育の現状と課題について
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/gyouji/__icsFiles/afieldfile/2015/11/20/1364697_04_1.pdf（2021.0929 取得）

Klinger LG & Dawson G (1996) Autistic Disorder. Mash EJ & Barkley RA Eds. Child Psychopathology Chapter 8. 311-339.Gilford Press.

National Autistic Society Strategy and Intervention-SPELL
https://www.autism.org.uk/advice-and-guidance/topics/strategies-and-interventions/strategies-and-interventions/spell（2021.1201 取得）

Notomi K (2001) Behavior Management of Children with Autism Educational Approach in Fukuoka University of Education. Chapter 23 228-234. In Richer J & Coates S Eds. Autism The Search for Coherence. Jessica Kingsley Publishers.

納富恵子（2009）自閉症の基本障害の理解とその支援・対応法　上岡一世・納富恵子編　明治図書

OECD OECD Education 2030 プロジェクトについて
https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf （2021.1201 取得）

奥野小夜・納富恵子（2007）高機能自閉症児へのコンピュータ学習を動機付けとしたソーシャルスキルトレーニングに関する研究　LD 研究 16　136-144

佐藤学（2009）教師花伝書―専門家として成長するために―　小学館